

監視というオブセッション

— 未来小説にみる監視と現代 —

日 中 鎮 朗

1 本稿の目的

20世紀後半からの未来小説——その多くは science fiction であり、ディストピア小説である——において、監視は重要な役割を果たしている。本稿ではそれらの小説における監視の特徴的な意味を分析し、監視の欲望をユートピア社会の表裏であるディストピア社会における完全性へのオブセッションと捉え、それを踏まえて、現代において監視は政治・権力機構の恐怖という位置づけから企業・経済消費と大衆の共謀へと変化してゆく文脈と意味をあとづけつつ、監視の変遷について考察する。

2 権力と監視の原風景

ジョージ・オーウェル (George Orwell, 1903-1950) の未来小説『1984』(Nineteen Eighty-Four, 1948年執筆, 1949年刊行) は、川端康夫が説明するように、スターリニズム批判(それゆえ『プラウダ』はオーウェル批判を行う¹⁾)、ファシズム批判であり、その内容は『タイムズ文芸附録』(1949年6月10日号)のジュリアン・シモンズの書評、「権力の本質と恐怖について真剣にかつ独創的なかたちで語った」(オーウェルはこれに対して感謝の手紙を送った)という言葉が簡潔に示している(川端, 231)。独裁国家の権力に疑問を感じ、その様態と規範に対して反逆を試みるウィンストン・スミスがテレスクリーンによって生活の隅々にいたるまで監視されていることは小説

冒頭から示される。

It was one of those pictures which are so contrived that the eyes follow you about when you move. BIG BROTHER IS WATCHING YOU, the caption beneath it ran. (…)

The instrument (the telescreen, it was called) could be dimmed, but there was no way of shutting it off completely. (…)

There was of course no way of knowing whether you were being watched at any given moment. How often, or on what system, the Thought Police plugged in on any individual wire was guesswork. It was even conceivable that they watched everybody all the time. (…)

You had to live — in the assumption that every sound you made was overheard, and, except in darkness, every movement scrutinized. (Orwell, 3-5)

被監視者に監視されているという意識(恐怖)をもたせるためには、監視は連続的、持続的監視であると思わせる必要があり、さらに被監視者の/への視線を管理者に集束させるシステムが必要である。

禁止事項の侵犯の発見は「監視」によって行われる。その背景には、『1984』についてクリシャン・クマー (Krishan Kumar, 1942-) が述べる“*The totalitarian ideologies — whether Fascist, Communist or Catholic — claimed possession of the absolute truth about the world.*” (Kumar, 306) といういわばオブセッションがある。“*The anti-utopias present a counsel of despair. In the most masochistic of them, 1984, even the catharsis of total destruction is excluded in order to make the picture of perfect totalitarianism more horrifying.*” (Ulam, 118) と Ulam は述べるが、この全体主義の「完全性」へのオブセッションはまさに「ユートピア=完全、完成状態」という定義へのオブセッションをなぞったものであり、未来小説におけるディストピア国家の監視も共同体構

成員に関する「すべて」を知る、つまり、「完全な」監視というオブセッションを体現しなければならない。

『1984』では権力機構が任意かつ秘密の方法で監視できる可能性が常時あるという状態によって、住民は24時間の監視を内面化せざるを得なくなる。『1984』の先行作品かつ下敷きとなったエヴゲーニイ・ザミャーチン (Evgenii Zamyatin, 1884-1937) の『われら』(MBI) (1924) においても監視は描かれているが、『われら』の語り手＝「私 (D503号)」もこの時点では国家の監視に受容的であり——「(…) この婦人が目を通した手紙は、更に守護局を通過せねばならず (この当然の手続きについて説明する必要はないと思う)」(ザミャーチン, 35), 「(現在この振動膜は優雅に偽装されて方々の大通りに配置され、守護局のために街頭の会話を録音している)」(ザミャーチン, 37, 括弧はすべて原文) ——, 概して検閲と会話録音だけで視覚的監視に至っておらず、監視における『1984』の先駆性は明らかである。

監視はジェレミー・ベンサム (Jeremy Bentham, 1748-1832) が設計した刑務所＝パノプティコン (一望監視施設。1840年代にはN・アルー・ロマンやA・ブルーエもパノプティコンの設計図を書いたが、これは産業化と都市への人口の集中、犯罪の多発というヨーロッパ近代の状況と無縁ではない) が有名である。監獄は元来、収監者の更生と社会での自立を目的とし、そのために秩序化された構造をもち、周知のように、ミシェル・フーコー (Michel Foucault, 1926-1984) は、パノプティコンの主要な効果を「権力の自動的な作用を確保する可視性への永続的な自覚状態を、閉じ込められる者にうえつけること」(フーコー, 203) とした。

監視は実際に監視されているという事実よりも、常に監視されているという意識 (をもたせること) によって強化され、完全化される。『1984』ではヘリコプターなどによる警察の物理的なパトロールもあり、さらに、監視の事実を断片的に明示することで (検挙, 逮捕, 裁判, 報道, 罰としての刑), 監視は常時、普遍的に行われていることを国民に可視化し、意識化

させる。大文字による「ビッグ・ブラザーはあなたを見ている」というポスターのコピーも監視の恐怖と遍在性を植え付ける。独裁国家のそうした言説の国家-国民^{ネーション・ステイト}への浸透によって、物理的、身体的拘束以上に国民の個人的生活から思考領域(“Only the Thought Police mattered.” (Orwell, 4)) までの管理・統制^{コントロール}が実現する。

監視とはそうした意識上の慣習化された思考機制の徹底化である。「常に監視されている」という付きまとう意識が被監視者の意識においてもオブセッションとなり、監視は機能的に成功するが、心理障害(被害的妄想)やパラノイ德的妄想となったとき、監視は恐怖になる。

監視と権力の関係を見てみよう。フーコーはベンサム^{ベナム}の原理を「その権力は可視的でしかも確証されえないものでなければならない」(フーコー, 203)とし、パノプティック(一望監視装置)の重要性を「権力を自動的なものにし、権力を没個人化」することにあるとする。つまり、『1984』の舞台ともいえるオセアニア(ロンドン)を巨大なパノプティコンと考えれば、監視システム自体が独裁者などの個人的権力者を没個人化し、自らが自動化する力をもつということになる。まさに「権力の本源は或る人格のなかには存せず、身体・表面・光・視線などの慎重な配置のなかに」あり、「ある現実的な服従強制が虚構的な〔権力〕関連から機械的に生じる」(フーコー, 204)と同時に、権力の維持も監視によって図られるのである。

フーコーは『監獄の誕生』第4部では①法律違反者として裁かれ、収監された収監者としての監獄での存在は、その違反した法律ではなく、「犯行よりもその生活態度」に基づくのであるということ、②監獄の監視では、『《生活史的なもの》』が「導入」され、それによって法律違反者は「知の客体」となる(フーコー, 248-249)という2点を強調する。つまり、被監視者は法・規律違反そのものよりも生活に焦点を当てて記録されるのである。それゆえ、「(…)行刑上の〈一望監視装置〉は、永続的で個人化をおこなう記録作成制度でもあり、(フーコー, 247)、これによって「相關的

に、非行〔＝在監〕者は認識されるべき個人になり、監獄は「知を組み立てる場」として「つくり変え」られる。(248, フーコー, [] は訳者)。

記録とそれに伴う知の形成、個人の認識は何を引き起こすだろうか？記録は現代の監視においても重要な特徴である。ブルース・シュナイアーによれば、現代の監視の特徴は「大量監視」(大量データ収集・監視)(シュナイアー, 52)という「網羅的監視」と、「オンライン上での電子的監視の場合には」「監視が目に見えない、もしくは大々的に公表されていない」ので、「私たちに見えないところで実行されている」(シュナイアー, 54)という不可視の監視とから成り立つ。不可視であっても、すべてが記録されていると我々が認識すれば、我々は行動を制限し、「その結果、私たちは個性を失い、社会が停滞しはじめる。権力に疑問を呈したり、異議申し立てしたりもしなくなり、従順で服従的になる。こうして、自由が縮小していく」(シュナイアー, 164)。つまり、生活史の記録こそが変革のダイナミズムを失わせ、無力化し、従順性を増大させるのであり、その土台が監視なのである。

フーコーはパノプティックというシステムを刑務所・刑務官(社会適合理化、矯正)、学校・教員(教育)、病院・医師(正常/異常判定)に見るが、それに限らず、ユートピア共同体を目指した工場や農場敷設の共同住宅として建設されたファランステール(phalanstère)にもパノプティックとしての機能が意図的に備えられており、そこでの情報は例えばファランステールの側廊の一角に座る老人等によって記録され、上部機関へもたらされるため、近代においても共同体構成員の日常的、網羅的側面はあった。一方、監視は一義的には「セキュリティ」のためにある(バウマン+ライアン, 14)。『1984』においては、独裁国家維持のためのセキュリティであり、現代のネット空間においては、経済・消費活動維持のためのセキュリティである。しかし、セキュリティが「誰かの/何かの維持の」ためである限りにおいて、セキュリティ監視の前提には従うべき規律の存在があり、それ

に人々(囚人や生徒や患者や未来小説における国民)を従属させることが意図されている。言い換えれば、規律から逸脱する監視対象を特定し、追跡し、処罰し、矯正するのもセキュリティのためなのである。逸脱と追跡・処罰の円環がセキュリティを構成する。

監視は国家等のイデオロギーや思考の領域での規律=権力の不可視の現前であるゆえに、実際には形而上的であり、それゆえ不可視の個人の思考領域においての「逸脱」が可能なのである。『1984』のウィンストン・ミスが権力国家にとって脅威であり、反体制的でありうるのは、形而上的逸脱であるからなのである。それゆえに、記録的、遍在的、網羅的監視を行い、自由を土台とする「逸脱者」を把握し、「政府の網羅的監視により規範が隙なく徹底されれば、この〔=規範逸脱〕プロセスが機能しづらくなる」(シュナイアー、165、□内は引用者)状況が作り出される。

なお、「各階で囚人の見張りを担当する監視人たちをも、こちらの姿は見られずに見ていられれば、監視は完璧だと言えるだろう。(…)独房内のすべての囚人を、また各階の回廊で監視中の看守を唯一の中心部から見ることは可能だと考えている」(フーコー、247)という1841年の内務大臣デュシャテルの言葉は、監視強化のための相互監視者間の監視意識相互内面化をさらに大きな権力=監視者が監視する全体的、完成的構造を示している。

3 ポストコロニアリズム・フェミニズム・ナショナリズムと監視

わずかに decade という単位の未来のある時点でアメリカ合衆国に政府転覆が起これ、ギレアデ共和国というファナティックな神権政府が成立し、その様相を語る侍女の語り(実はそれはテープに録音された話をつなぎ合わせて再構成したものであり、それについて2195年に学会で討議しているという杵物語)が、マーガレット・アトウッド(Margaret Atwood, 1939-)の『侍女の物語』(*The Handmaid's Tale*, 1985)の小説の構成である。

『侍女の物語』はポストコロニアリズム、権力（男性-父権制社会）とフェミニズム、また物語論と映画化やテレビドラマシリーズなどのアダプターションの視点から捉えることができる。したがって例えば、トランプ大統領の就任演説の際の侍女のコスチュームによる抵抗の主張という形で様々な政治的な場でも引用がなされる。また、Kröller は「ギレアデ国は『生きた現実』としてすでに進行中であると認識する者もいる」と指摘し、ペイルート生まれでワシントンを本拠地とするサウジ・アメリカンの詩人、Majda Gama の「ジェンダー・アパルトヘイト」を例に挙げるのであり (Kröller, 189), Hulu の『侍女の物語』のテレビドラマシリーズをアダプターションの観点から分析し、レイシズムに関するアトウッドの反応に批判も加える (Kröller, 200)。つまり、この小説は現実との関わりを促すのである。

Wilson もアトウッドの *intertextuality* をグリム童話や昔話の見出しつつ、童話でのジェンダーの役割と文化を侵犯する過程を辿りつつ (Wilson, 60-61), 『侍女の物語』の外枠で学会におけるピークソート教授の言動を分析し、現実世界との *engagement* (=ここで *involvement* と言われているもの) を強調する。

He (= Pieixoto) sees Offred as data to be processed; her full humanity eludes him. But *The Handmaid's Tale* creates that humanity for readers willing to disengage themselves from Pieixoto's sterile rationalism. (…)

Reading Atwood's texts is a postcolonial education in learning to balance and involvement, and in learning to see the ways in which we both are and are not the world. (Wilson, 54)

オブフレッドをデータとしてみるピークソート教授の姿勢は第7節に詳述する現代の仮想空間での大量データによる個人史形成のスタンスと同じ

であり、アトウッドが現代の政治、経済、文化を常に物語の参照枠に入れていることは、『侍女の物語』を現代の状況と関係させる必然性と必要性を担保している。アトウッドの文明評論 *Survival* (1972) はカナダをアメリカによる政治、経済、文化的支配を受けている被害者としてみると同時に、否定→受容→疑問→被害者性（被害者意識）の創造的拒絶 (creative refusal of victimhood) という4段階の脱却過程を示すが、さらに Diana Brydon はアトウッド作品をポストコロニアリズムとナショナリズムの観点から読む視点を提示する。

Although Atwood's *Survival* (1972) has generally been read as a nationalist text, its nationalism has seldom been interrogated from a postcolonial perspective, which recognizes that nationalism means differently in different contexts. (Brydon, 50)

アトウッド作品のマージナルな主人公はポストコロニアリズムの思考のもとで、女性や人種的マイノリティ、つまりガヤトリ・スピヴァク (Gayatri Spivak, 1942-) のいうサバルタンである (“Gayatri Spivak suggests that postcolonial is becoming the name for “a new object of investigation — ‘the third world,’ ‘the marginal’.”) (Brydon, 222)。スピヴァクが「国家の働きを覆い隠す文化ナショナリズム」(スピヴァク, 『ナショナリズムと想像力』, 53) の発見、自覚、またそこから脱却を促すとき、この覆い隠すナショナリズムの機能はディストピア小説の独裁国家のいわばナショナリズム・システムと同質であり、さらに、「現代における労働の国際的分業は一九世紀の領土支配的帝国主義によるフィールド分割の転位態」(スピヴァク, 『サバルタンは語ることができるか』, 51) としてサイド的な脱・帝国主義の視線を現代に転位すれば、未来小説における独裁的な政権に生きる D-503 号, ウィンストン・スミス, オブフレッドと国家イデオロギーの浸透を目指す帝国主義的

ナショナリズム下のサバルタンは同じ状態にあることがわかる。

確かに、侍女＝生殖機能という性的な扱いや儀式、またアパラチア高地での the Angels of the Apocalypse 「黙示録の天使」や the Angels of Light 「光の天使」軍とパプテストのゲリラとの闘いのテレビニュースは時代的な違和感を読者に引き起こし、この小説が通常の現実的なリアリズム小説ではないことを示唆するが、それ以外の描写は基本的には執筆された 80 年代の、あるいはむしろオブフレッドの母親の時代の 60 年代の生活と見分けがつかない。未来小説であるにもかかわらず、未来的テクノロジーはコンピュータ、コンピューチェックといった語以外ではほぼ現れず、未来的監視もほとんど披露されないことが現代社会やナショナリズムと監視を結びつける。

ここでの監視は、通りに検問所 gateway や柵 barrier があり、銃を持った「護衛兵」guards や「信仰の保護者」the Guardians of the Faith が見張るという伝統的、物理的、可視的監視である。ギレアデ共和国では、生殖に結びつかない恋愛、また侍女は愛のある性交は禁じられており、禁止は発見（発覚）と罰によってはじめて意味を持つゆえに、違反者、とくに「性の背信」は罰として首にプラカードをして見せしめに壁にぶら下げられる。神権国家では宗教的な禁忌の懲罰が国家の法体系と結びついて、絞首刑を見世物にすることを合法にしている。

There are three new bodies on the Wall. ... The two others have purple placards hung around their necks: Gender Treachery. Their bodies still wear the Guardian uniforms. (Atwood, 53)

罰の存在や様態自体が国民や共同体の成員に可視化され、意識化されることによってはじめて禁忌や規範は有効に働き、罪の行為という抑止として機能し、禁止事項の侵犯は遠ざけられる。監視は上述の古典的、可視的

監視と並行して、情報提供者と結ぶ不可視の秘密監視組織「目」Eyesによっても行われる。交友関係の誰が密告者であり、誰が「目」の一員なのか分からないという不可視の監視が日常の生活様式に入り込んでいる。テレビのニュース番組が伝える“Now he’s telling us that an underground espionage ring has been cracked, by a team of Eyes, working with an inside informant.” (Atwood, 93) というニュース報道は——公的情報の真偽自体の疑わしさは『1984』と同じとはいえ、アトウッドの物語論的な読者戦略上にあっては、カフカの小説における言説・論理や情報の揺らぎと共通の要素と考えるべきである——、「目」の存在自体は秘密ではなく、逆にその存在を明示・誇示し、常態的な不可視の監視があるという恐怖を国民に内面化させる役割を果たす点において「ビッグ・ブラザーはあなたを見ている」というポスターと同じ位置づけにある。

4 リアリズム小説における監視

ここで、未来小説ではない物語における監視を見てみよう。例えば、フランツ・カフカ Franz Kafka (1883-1924) の『審判』*Der Prozeß* (*Der Prozess* 1914-1915 執筆, 1925 公刊), 『城』*Das Schloss* (1922) も社会や共同体による監視と信頼できない情報——その背後には信頼できない語り手がいる——の物語といえるし、ポール・オースター Paul Auster (1947-) の『シティ・オブ・グラス』*City of Glass* (1985) は一般の個人, 『幽霊たち』*Ghosts* (1986) は私立探偵(ブルーがブラックを監視するが、やがてブルーの方が監視されている状態に気づく)といった個人による、〈1(監視者)対1(被監視者)〉形態の監視の物語である。監視においては、パノプティコン型の〈1/少数(監視者)対多(被監視者)〉形態に対して、現代では〈多(監視者)対多(被監視者)〉形態が特徴である。未来小説、ディストピア小説が現代を告発し、警告を与え、現状を再考させるという特質を持つ点を踏まえると、カフカやオースターの小説では告発性よりも人間心理に焦点が当てられて

いる。人間心理がリアリズム小説の一つの特徴と考えれば、〈1対1〉形態の監視は、例えば、心理描写を監視者から被監視者にずらすことによって、容易にストーキング小説に転換される。長江俊和(1966-)は信頼できない語り手を生かした『掲載禁止』(2015)などの多層構造の物語を作るが、メールを介した『恋愛禁止』(2019)を見ると、リアリズム小説では監視は不条理や心理的恐怖に収斂されてゆくことがわかる。

5 監視＝権力＝恐怖からの脱却と転換

トム・ヒレンブランド(Tom Hillenbrand, 1972-)の『ドローンランド』*Drohnenland* (2014)はSF・未来小説だが、現代の問題性の警告・告発もない、ユートピアでもディストピアでもない近未来世界を描く。基本的に現在の世界地政学が踏襲され——ただし、中東の核攻撃、放射能汚染、マグレブ諸国とEU軍の太陽光エネルギー施設をめぐる「ソーラー戦争」という歴史の暗示では核戦争と環境問題を、また、過激キリスト主義者との戦いでは宗教原理主義と民主主義の対立を踏まえ、さらに「欧州の統合を疑問視し、ナショナリズムに回帰する」(Hillenbrand, 188)イギリス批判(マーガレット・サッチャーは20世紀の分離主義者 *eine separatistische Zelle*)やシャルル・ド・ゴールとオーストリアの国粋主義者のイェルク・ハイダー批判では、政治問題をテーマ化している——、波動発電所(Wellenkraftwerke)などIT技術の発展ゆえにEUで最も裕福な国家になったポルトガル(Hillenbrand, 122)や「いつか彼らはブリュッセルじゅうを、ほかにはリスボンやパリを、買い占めてしまう」(Hillenbrand, 85)ブラジル人といった、現状を警告しない未来地政学上の変更があるだけである。欧州は強大な力を持つ欧州議会や欧州委員会によって、EUを中心として民主的に運営され、ユーロポールという組織から逸脱的なユーロポール警部捜査官の主人公の「わたし」＝アート・ヴェスターホイゼンと女性ユーロポール・アナリストのアヴァ・ビットマンが欧州議会議員殺害の国家的陰謀を暴くというス

トリーである。

この小説は尖端的未来科学技術を飽くことなく披露する。個人所有の地球周遊宇宙船、記録装置の眼鏡「スペックス」、医療機関と結ぶバイタル送信機、分子スキヤンの普及、さらに、シリコン量子コンピュータはすでに旧式になっているという世界であり、科学技術の披露という点では伊藤計劃の『ハーモニー』(2008)——ここでもインターポール捜査官が重要な役割を果たす——と同様である。ただし、科学技術が世界だけではなく、小説のあり方自体を変えると考える伊藤計劃に対して、ヒレンブランドは「知」そのものを問う。どのようにだろうか？

この小説のプロットを成立させる土台は無数のカメラと多種多様なドローン——小型ドローン〈ハチドリ〉、高度上空に浮遊し、大都市を監視するパノプトス型ドローン、偵察・武装ドローンなど十数種現れる——による24時間の遍在的監視である。アートとコングロマリット支配者のタランとの会話(»Sie meinen, das aus der Überwachung anderer entstehende Gefühl der Überlegenheit, der Allwissenheit, das ist der Kick?« »Ja, das Gefühl von Macht. Letztlich geht es stets darum.« (Hillenbrand, 205))から、監視は優越、全知、力の感覚とされるが、それ以上に重要な特徴は、ドローンの映像やバイオメトリック(個体)、バイタルメトリック(生体)の記録データからのコンピュータ合成によって過去の再現・複製時空間を作り、そのなかに入っていく没入型ミラーリング(テイレシアス, TEElementric Reenactments and Immersive Simulations of Actualities, 現実の遠隔測定再現・没入型シミュレーション, Hillenbrand, 105)や人物も複製するミラースペースを使ったライブミラーリングである。大黒岳彦は、没入は「日常的」「光景」を「括弧に括る」ことで「排去」し、「人工的」光景で隈無く代替するが故に、徹底的(大黒, 260, ドイツ語ルビ省略)であり、そこで「身体によって「光景」との間で「相互作用」(Interaction)を営む」(大黒, 261, 傍点・括弧大黒)ことで光景に作用できると考える。Esselbornもボードリヤールを援用しながら、シミュラクル、

人工的な像の背後に物理的な現実が消えてしまうという状態について述べ、やはり経験の地平の没入と相互作用の必要性を強調する。

Die Suggestion von Sinneswahrnehmungen erfolgt mit Hilfe des Computers, doch virtuelle Welten werden erst dann als Realität erlebt, wenn sie infolge von Immersion und Interaktivität als Erfahrungshorizont für die Konstruktion einer eigenen Welt akzeptiert werden. (Esselborn, 138)

実際には、ミラースペースでは相手からは不可視で、物との現実的な Interaktion はなく、コンピュータがデータに「現在の知覚的印象」(Hillenbrand, 88)を蓄積し、疑似的感觉を与えるだけなのだが、ミラーリングが無数の監視から集まる個人データの集積によって形成される、フーコー的「個人生活史」のデジタル的再現であることがここでは重要である。

Der Mirrorspace ist eine kontinuierliche echtzeitpiegelung. Alles, was wir an Daten kriegen — Videofeeds, Colibrifotos, Aufnahmen von Katasterdrohnen, die Signaturen aller Autos und Bürger —, wird von TEREISIAS aggregiert, um ein hochauflösendes, dreidimensionales Orthomosaik zu errechnen. (Hillenbrand, 86)

一回限りの、オリジナルな現実(世界の事象)の世界の大量監視データによる完全な複製はベンヤミンのアウラ喪失の概念を「芸術」から「世界」へ拡張するということが問題なのではない。アウラが一度きりの輝きであれ、滅びゆくものの最後の光芒であれ、アウラ概念(を考へ出す思考機制そのもの)が Virtual Reality によって無効化されるということが問題なのである。ジョニー・ランダムがアートに語る科白, “Vor gut einem Jahrzehnt, (…), wurde einigen Programmierern klar, dass man mit der

Fülle an Livedaten, die unsere Sensoren schon damals aus allen Ritzen und Winkeln der Realität saugten und auf Festplatten speicherten, eine Kopie der Welt bauen könnte, eine virtuelle Welt”. (Hillenbrand,365) はそうした地平の変革の意味を包含している。

ここにおいて精密で網羅的な「個人生活史」の記録が過去と現在の複製であることとつながるのである。しかもこの小説は時間的に未知な部分は未来(の予測)であるという点に読者を導く(“Aber wie immer bei prädiktiver Software gab es ein paar Personen, die sich nicht fassen ließen, weiße Flecken auf unserer politischen Landkarten. Ein paar Unwägbar, Unprognostizierbare, Sprunghafte, das liegt wohl in der menschlichen Natur.” (Hillenbrand, 414))。

とはいえ、この小説の新しさは、未来行動予測そのものではない。〈機械・ロボット(の進化による知性の獲得と人間への反逆、支配の恐怖)VS人間〉という伝統的ディストピア的図式を廃棄して、〈予測アルゴリズム(未来の状態は確率論では現在の状態だけで決定され、過去の出来事によらないと考える²⁾マルコフ過程、マルコフモデル Markov Model) VS 人工知能では捉えきれない逸脱性、多様性、予測不可能な豊かさ・可能性をもつ人間の行動逸脱・予測行動不可能性(予測アルゴリズムでは予測できない人間の行動の予測不可能性=この小説での「マルコフ変調」Markov-Anomalie (Hillenbrand, 403)³⁾〉という新たな対立図式を打ち出したことにある。つまり、伝統的図式の機械(コンピュータ)と人間のどちらにより多くの知性があるか、ではなく(それゆえに、レイ・カーツワイル Ray Kurzweil (1948-)の言う「シンギュラリティ」(The Singularity Is Near, 2005 参照)が否定される。“Anfang des Jahrhunderts waren Programmierer und Systemdesigner zuversichtlich, dass Rechner eines Tages cleverer sein würden als wir. Sie rechneten fest mit der Entstehung von KIs, Künstlichen Intelligenzen. Sie nannten es die Singularität, weil danach alles anders sein würde.” (Hillenbrand, 101)), 人文主義的次元の「人間らしさ」の讃歌、文学が頼りにする創造性、精神、想像力を乗り越えて行動や思考の選択可能性や自由意志における知性その

ものを問い直す地平をこの小説は開いているのである。

6 SNS (ソーシャル・ネットワーキング・サービス) と監視文化

デイヴ・エガーズ Dave Eggers (1970-) の『ザ・サークル』 *The Circle*, (2013) は、巨大 IT、インターネット会社サークル社に入社した主人公のメイが作る「プライバシーは盗み」「秘密は嘘」「分かち合いは思いやり (シェアはケア)」というモットーが『1984』の国家のモットーである WAR IS PEACE, FREEDOM IS SLAVERY, IGNORANCE IS STRENGTH. (Orwell, 19) と平行であるように、『1984』を強く意識している、極めて近い近未来小説あるいは同時代小説だが、情報の扱いに関して『1984』や『侍女の物語』などのディストピア小説とは全く逆になるテーマ設定、あるいは問題提起を行っている。というのは、独裁的支配によるデータ情報の秘匿・独占や、知る権利や表現の自由を奪うことではなく、むしろ、その逆に、「透明性を推奨」(エガーズ, 221) し(「起こったことは全て知らされるべし」(エガーズ, 76, 77)), 「すべての知識が民主的に」「情報が自由に手に入るのは自然な状態」であり、「人類には知り得ることはすべて知る権利がある。人類は世界中で蓄積した知識を集団として所有している」(メイとサークル社創業者ベイリーとの会話, エガーズ, 322) という知識の共有を目指すからである。サークル社は専制主義を排除し、民主主義を称え、人権擁護を掲げる (エガーズ, 76)。

「ベイリーは、みんながみんなに、そしてみんなの知っていることを全てに際限なくアクセスできれば、人類はより良く、完璧になると信じている。(…)彼はオープンさが、すべての人類同士の完全で留まることない繋がりが、世界を良くすると真に信じているんだ。(…)すべての情報は、個人のものであれ何であれ、あらゆる人々に知らなければならない。知識とは財産であり、誰もそれを所有することが

できない。」(エガーズ, 509)

ベイリーの思想に対する批判軸がメイの友人のタイ＝カルデンであり、資本主義的野望家との結合を危惧し、知られないことの権利(「我々はすべて姿を消す権利を有しなければならない」(エガーズ, 511))を主張するが、情報や知のオープンネスや共有それ自体は民主主義が称揚・追求してきた価値であり、それゆえメイは「サービスや情報へのアクセス」の「平等」は人間や社会の「平等」の実現をもたらすと主張し、タイ＝カルデンが危険とみなすトラッキングも「犯罪、(…)殺人も、誘拐も、強姦も」サークルという善意の人間たちによって見張られ、世界中のどこからでも誰にも情報が届き、ライブ映像が送られ「知ること」によって、なくなると論破する(エガーズ, 510)。

知ることと監視は実際には表裏一体である。ここにおいて監視そのものが恐怖や侵害であり、監視は国家や社会＝権力によって秘かに、また強制的になされる悪や恐怖であり、人々は望まぬまま監視に身をさらされると批判する文化は終焉する。

『1984』やハクスリーの『素晴らしい新世界』を十分に意識しつつ、また「二世紀の消費者監視の恰好のイメージ」として、カフカの『審判』をあげ(ライアン, 92)、マーガレット・アトウッドに言及し(ライアン, 216-219)、エガーズの『ザ・サークル』の世界を現代的な監視文化を表象するものとして論じるデイヴィッド・ライアン(David Lyon, 1948-)は「監視文化」の概念を提唱し、現代において監視文化はもはや生活の周縁でも外部でもなく、「生活様式全体の一部」(ライアン, 17)であるとして⁴⁾、「監視文化」の特徴を次のように述べる。

かつての「監視国家」、あるいは「監視社会」が言われた時と比べて、監視により利害を持ってしまっているのではないか。「監視国家」

や「監視社会」は、個人や社会に対していかに監視がなされるかを表した言葉だが、「監視文化」はそれを超えている。組織的な監視が行われていることを認めつつも、私たち自身が監視に関連して行っている多様な役割に焦点を当てようとする言葉だ。(ライアン, 15)

これに従えば、監視文化は人権思想や知る権利といったコンヴェンショナルな発想を超えてゆく。ライアンは、レイモンド・ウィリアムズ (Raymond Williams, 1921-1988) が文化概念を「衰えつつあるが依然として何らかの役割を果たしている」「残滓的」(residual) 文化と「支配的に文化になる可能性を有しつつ、それに対抗したり、代替したりする可能性もある」「勃興的」(emergent) 文化 (ライアン, 18) の二つに分けていることを紹介している。

知る権利に関する「残滓的」文化の象徴的な例として、昭和46年の沖縄返還協定におけるいわゆる「肩代わり密約」問題の暴露、つまり、外務省事務官の蓮見喜久子による毎日新聞社の西山太吉記者への秘密文書漏洩とその新聞紙上及び社会党への資料提供（および一連の裁判）を挙げることができる。我々の論の文脈では検察/裁判所の言う「情を通じての」情報入手・漏洩という位相が問題ではなく、この事件を国家—権力—威嚇（「蓮見さん有罪の判決は、心ある公務員をも用心深く臆病にさせ、国家機密秘匿のための威嚇の効果は、私たちの想像以上のものがあるらしい。」(澤地, 267), 「しかし終始安全圏にいて、機密保護法制定の野心をちらつかせさせた政治権力は、責任関係をみごとにすりかえてしまった。」(澤地, 268)）による「知る権利」の侵害として捉え、それ自体は重要かつ必要であった/ある「知る権利」「報道・言論の自由」(澤地, 223) が要求されているが、「起こったことは全て知らされるべし」と考える現代の「勃興的」文化のなかに入れると、この自明と思われていた権利要求自体が意味をなさなくなってしまうのである。誤解してはいけないのは、インターネットなどのテクノロジーの進

化それ自体が「勃興的」文化を意味するのではなく、データの公開性が開かれた社会を作り、それが正義や公正さを実現すると考える価値体系や思考機制自体がデジタル・ソサイエティによって無効にされつつある「残滓的」文化であり、それを認識する「勃興的」文化の思考から始めねばならないということである。

「あらゆるものとあらゆる人が可視化されるべきだと考え」、「可視化されるためには、観察しなければならず」「二つは不可分」であり、多くの人と同様に、「わたしは可視化されたい。見られていたい。私が存在したという証が欲しい」ので、「(…)知っていることはすべて、知っている人は全員、あらゆるものを取引に差し出す」(エガーズ, 510, 511)とメイが言うように監視に人々は望んで監視に身をさらしており、アイデンティティ形成は現代のインターネットや SNS という仮想空間のなかでなされるのであれば、今や、監視を欠くことのできない本質的な一つの文化として捉える必要がある。

つまり、監視はもはや国家や権力組織から個人に向けて行われる一方的な支配的管理装置ではなく、「かつてないほど、普通の人々が、監視に貢献して」おり、「利用者自らが作り出すコンテンツ (UGC = User-generated Content) が、日々観察されるデータを生み出す」(ライアン, 9, 括弧内は訳者) ことによって形成される一つの文化であり、商業ベースのプラットフォーム上で個人情報やデジタル空間で共有させ、進んで監視に身をさらす幻想の共同体への参加が現代の監視なのである⁵⁾。

7 独裁的権力から大衆の共謀へ

国家や IT 企業が情報を秘匿・独占・濫用する危険があることは認識しつつ、「人々が監視を経験しているだけでなく」「自ら」も監視に「関与している」あり方を認識すること、人々が「監視に服従している (subjects to surveillance)」状態から「監視の主体 (subjects of surveillance)」(ライアン, 282)

になっている時代が現代である。データ（情報）の生産と消費（分配）は経済的事象に属し、監視は国家権力から企業にも移っているので、経済的要因が監視を成立させる。「今日中央集権的なパノプティコンはみられ」ず、監視は「アガンベンが開発した、ジャン＝リュック・ナンシーの「バン（禁止）」の発想を、フーコーの「オプティコン（見る）」と結びつけた」パノプティコン (ban-opticon) となり、周縁者を排除する機能をもつ（バウマン＋ライアン、86）。この「パノプティコン・ダイアグラムの戦略的機能は、マイノリティを「歓迎されざるもの」として浮上させ」るため、新たな植民地主義、帝国主義と考えることができ、『ドローンランド』では否定された「今後に予想される行動を理由に」「事前に排除する」（バウマン＋ライアン、87）ことすら行われる。

一方で、監視の形態に注目すると、パノプティコンが一般に権力をもった「1/少数が多数を監視する」形態であるのに対し、一緒に、見物的に「多数が少数を監視する」という状態の「シノプティコン (synopticon)」(トマス・マシーセンの造語) もある（バウマン＋ライアン、94）。

また、デジタル・ソサエティにおいては「多数が多数を監視する」状況は、社会規範や倫理からの逸脱者に対して好奇心や攻撃的衝動、欲望の生贄として、発見、特定、追跡、特徴分析、分類リスト作成行為を行う。これは元来、権力者が犯罪者に対して普遍的な社会秩序の回復、「揺るぎない理性の支配下にある秩序をもたらすこと」（バウマン＋ライアン、108）を目指して行う公的行為であった。秩序維持の権限も責務も付与されていないソーシャルメディアにおけるこうした行為の正当性を担保する根拠や準拠枠が多くの場合「道徳性、倫理性」であるため、このポスト・パノプティコン状態はモダニティの分離状態を生み出す。

バウマンはザミャーチンやオーウェル、ハクスリーのディストピア小説のような「ソリッドモダン世界」では「綿密に管理され、秩序にとりつかれた生産者と兵士」という「恐怖の未来図」が描かれるが、これに対して

ミシェル・ウエルベック (Michel Houellebecq, 1958-) (とくに『ある島の可能性』(La Possibilité d'une île, 2005)) を参照しつつ、「管理と(その忠実で不可分の同伴者である)抑圧の過剰ではなく、すべての悩みを無意味で不要なものにするその欠乏」があると言う(バウマン+ライアン, 142, 143, 括弧内と傍点バウマン)。社会の共通理解とされる道徳・倫理を準拠枠にしたこうした監視は、特定の権力者/組織がもつ「最終的な秩序のヴィジョン」(バウマン+ライアン, 151)がないゆえに、管理も抑圧もないかわりに、新しい世界秩序構築の意志もダイナミズムもなく、こうした大衆の(善意の)監視は結果的に現行の秩序体系の平面的、水平的、表層的な維持装置として機能するだけである。社会体系は消費、資本、マネーを基調とする市場や巨大ITが決定し、流動化するが、その不安定な社会構造の中で、大衆は倫理的価値体系に生存の根拠を見出すしかなくなり、大衆の奉じる倫理的価値体系は固定化したままになる。

一方で、モダニティが流動化、不安定化しているとして導入したバウマンの「リキッド・モダニティ」という概念をライアンは次のように説明する⁶⁾。

第一に、あらゆる社会的形態が急速に溶解してしまつて、新しい形態をまとうことができません。それらの形態は自らの形を保持することができず、その有効期限の短さのために、固体化して人間の行動や生活の戦略の参照の枠組みになることができないのです。(…)

第二に、(…)権力と政治が分離しつつあります。(バウマン+ライアン, 15-17)

「リキッド・モダニティの段階では権力は自由に流動して」おり、「ソーシャルメディアの中に監視の権力がはびこっている」のである(バウマン+ライアン, 19, 傍点はバウマン+ライアン)。その根底にあるのは、資本と

消費への欲望であるから、ライアンは「アイデンティティを（…）消費の世界に置」き、「監視文化の重要な側面は商業的プラットフォームに埋め込まれた可能性を反映している」ことを強調・重視する。（バウマン+ライアン, 21 および 15）つまり、監視は国家 VS 大衆の構図ではなく、大衆＝消費者の間での「共謀」関係になる。なぜなら、「個人情報オンラインのパブリックな領域に「シェア」することで（…）かつてないほど自らの監視に「共謀」してしまっている」（バウマン+ライアン, 21）からである。

大黒はライアンの「監視社会」を「監視の脱空間化」, 「脱身体化」(監視機能の「社会的「選別」」^{ソーティング}), 「データ監視」の3点にまとめ、批判し（大黒, 217-226, とくに 220-225, ルビは大黒）, ライアンの「良い監視（＝「配慮」）」^{ケア}（ケア倫理）は「庇護」的で、「パターナリスティックな権力関係を前提」としたケアである（大黒, 223）と分析する。そのケア理解を認めたいうで言えば、ライアンは「人々が得るものはネットワークであって、「コミュニティ」ではない（58, バウマン+ライアン, 第1章「ドローンとソーシャルメディア」, 特に, 53-73 参照）とし、コミュニティにはソリッドな価値、すなわち、友情、信頼、「ケア」, 帰属性（の安全と拠り所）あるいは事実があるが、ネットワークにあるのは、リキッドな状態、すなわち不安定なセキュリティと「シェア」あるいは幻想・虚構であるとしており、『ザ・サークル』のコンテキストでの「分かち合いは思いやり（シェアはケア）」に対するライアンの理解を見ると、ライアンの共有^{シェア}＝配慮^{ケア}認識には揺らぎがあると思える。

最後に現代のリアリズム小説を通して SNS やネット空間の受容の変化を見ておきたい。宮部みゆき (1960-) の『R.P.G.』(2001) はそれ自体が SNS での疑似家族という Role Playing Game の殺人事件を扱い、警察署での被疑者カズミたちの Role Playing を取調室のミラー越しに真犯人、所田一美が監視する（それを刑事が監視する）という物語だが、SNS に虚構や欺瞞だ

けではなく希望も見出している。

カズミは言っていた。ネットのなかの家族ごっこは楽しかったと。そこでしか得られないものがあつたと。大切だったと。お母さんも言っていた。孤独な人生を慰めてくれるものが、そこにはあつたと。
(…)

もしも所田一美が、ネットのなかに足を踏み入れ(…)、ハンドルネームの陰に安全に身を隠して、その心の内を誰かに語る機会を得ていたら?(…)

ひょっとしたらそのネットのなかの誰かは、(…)果たしてくれたかもしれない。(…)彼女に語りかけ、彼女を癒し、彼女の怒りを理解する役割を。(宮部, 290 なお、「お母さん」はSNS内の人物)

ネット時代の初期には、ネットは自由で開かれた言論空間であるという期待と同時に、共有は^{シェア}配慮であるという希望も確かに共有されていたことがわかる。ネットが人々に浸透していくにしたがって、変化していったその結節点と原因を今後は解明する必要があるだろう。

監視はユートピア/ディストピアの完全性へのオブセッションとして「いつでも・どこでも・あまねく」という形態を目指したが、その形態がテクノロジーと密接に結びつき、巨大IT独占企業を介して大衆=消費者に共有という形で開かれ、「知」の開放と大量データの蓄積がなされた。オーウェルの「監視—権力—独裁国家」という思考を乗り越え、共有と共謀の差異を意識化し、「監視—科学技術—大衆」の地平を切り拓く思考が必要となるだろう。

【註】

- 1) プラウダによる批判とともに、オーウェル自身の声明文、「中央集権的経済

監視というオブセッション

が陥りやすい誤謬、すでに共産主義やファシズムにおいて部分的に実現している誤謬を暴露しようとしたもの」(『ライフ』1949年7月25日号、『ニューヨーク・タイムズ・ブック・レビュー』1949年7月31日号)が紹介されている。(川端, 前掲書, 234)

- 2) マルコフモデルの簡潔な定義を掲げておく。

「マルコフモデル (Markov Model) とは、複数の内部状態を有し、その状態間を確率的に遷移するシステムにおいて、未来の状態が現在の状態だけで決定されると考えられた時 (これを、マルコフ過程に従うという)、入力分布の時間発展を予想する確率モデルである。システムの全ての状態間遷移は確率変数によって定義されている。」(古谷和春, Markov モデル (jst.go.jp), DOI: https://doi.org/10.14894/faruawpsj.51.12_1160_2)

- 3) マルコフモデルは、現在ではマルコフ変調ポアソン過程など様々に修正され活用されているが、未来予測はなされない。
- 4) この「生活様式」という語は「勃興的文化」のなかの「生活様式」であることに留意しなければならない。ライアンはエドワード・スノーデンのNSAなどによる大量監視の暴露を時代的な分水嶺とするが、スノーデンの行為にはこの両方の文化概念 (政治的誠実さによる内部告発は「残滓的」文化、ジャーナリストとの協力という点で「勃興的」文化) (ライアン, 18) が含まれているとする。

こうした現代の状況の中で、「知る権利」などの権利要求を至上価値とする考えについては、塩田武士 (1979-) の『罪の声』(2016) で社会に革命をという 60 年代のマルクス主義思想の犯人に与えられる fossil という言葉が妥当する理由と意味も含めて問い直していく必要があるだろう。

- 5) もちろん、一党独裁による監視国家の恐怖形態は依然として存在するが、それをもって新しい状況を無視したり、考慮しない理由にはならない。それは現代文化を見る視点を妨げる思考でもある。
- 6) ライアンはジル・ドゥルーズの根茎のような「管理社会」に監視を見ている。(「追伸——管理社会について」『記号と事件』宮林寛訳, 河出文庫, 2007年より, バウマン+ライアン, 15) また、バウマンは、これを経営哲学の文脈の中で、リソースとしての個人が自発的に自己規律をすることが可能になる状態と解し (バウマン+ライアン, 97-101), 『ザ・サークル』のメイ同様、大量監視・大量発信の肯定的側面と捉えている。

【Works Cited】

Atwood, Margaret. *The Handmaid's Tale*. London: Vintage, 1988.

- Hillenbrand, Tom. *Drohnenland*. Verlag Kiepenheuer & Witsch, Köln, 2014.
- Kumar, Krishan. *Utopia & Anti-Utopia in Modern Times*. Cambridge: Basil Blackwell, 1987.
- Orwell, George. *Nineteen Eighty-Four*. London: Penguin Books, 1989.
- Brydon, Diana. “Beyond Violent Dualities”. in Sharon R. Wilson, Thomas B. Friedman, and Shannon Hengen (eds.), *Approaches to Teaching Atwood’s The Handmaid’s Tale and other Works*. New York: The Modern Language Association of America, 1996.
- Esselborn, Hans. “Herbert W. Frankes Romane zwischen Antiutopie und Virtualität.” in Hans Esselborn (hrsg.), *Utopie, Antiutopie und Science Fiction im deutschsprachigen Roman des 20. Jahrhunderts*. Würzburg: Königshausen & Neumann, 2003.
- Kröller, Eva-Marie. “*The Hulu and MGM Television Adaptation of The Handmaid’s Tale*”, in Coral Ann Howells (ed.), *The Cambridge Companion To Margaret Atwood (Second Edition)*. Cambridge: Cambridge University Press, 2021 (First Published 2006).
- Ulam, Adam. “Socialism and Utopia. in *Utopias and Utopian Thought*, Frank E. Manuel (ed.), London: Souvenir Press, 1973.
- Wilson, Sharon R. “Atwood’s Intertextual and Sexual Politics,” in Sharon R. Wilson, Thomas B. Friedman, and Shannon Hengen (eds.), *ibid*.
- エヴゲーニイ・ザミャーチン, 『われら』, 小笠原豊樹訳, 1977年, 集英社
- ガヤトリ・C・スピヴァク, 『ナショナリズムと想像力』, 鈴木英明訳, 青土社, 2011年, (Gayatri Chakravorty Spivak. *Nationalism and the Imagination*. Calcutta Seagull Books, 2010.)
- ガヤトリ・C・スピヴァク, 『サバルタンは語ることができるか』, 上村忠男訳, みすず書房, 1998年, (Gayatri Chakravorty Spivak. “Can the Subaltern Speak?” in Cary Nelson and Lawrence Grossberg, (eds.), *Marxism and the Interpretation of Culture*. Urbana: University of Illinois Press, 1988.)
- 川端康夫, 『ジョージ・オーウェル——「人間らしさ」への讃歌』, 岩波新書, 2020年
- 澤地久枝, 『密約—外務省機密漏洩事件』, 岩波現代文庫, 岩波書店, 2006年
- ジグムント・バウマン+デイヴィッド・ライアン, 『私たちが、すすんで監視し、監視される、この世界について——リキッド・サーベイランスをめぐる7章——』, 伊藤 茂訳, 青土社, 2013年 (Zygmunt Bauman & David Lyon. *Liquid Surveillance: A Conversation*. Cambridge: Polity Press, 2012.)

監視というオブセッション

- 大黒岳彦, 『ヴァーチャル時代の哲学』, 青土社, 2018年
- デイヴ・エガーズ, 『ザ・サークル』, 吉田恭子訳, 早川書房, 2014年 (Dave Eggers. *The Circle*, Knopf, 2013.)
- デイヴィッド・ライアン, 『監視文化の誕生——社会に監視される時代から、ひとびとが進んで監視する時代へ』 田畑暁生訳, 青土社, 2019年 (David Lyon. *The Culture of Surveillance: Watching as a Way of Life*. Cambridge: Polity Press, 2018.)
- ブルース・シュナイアー 『超監視社会——私たちのデータはどこまで見られているのか? ——』 池村千秋訳, 草思社, 2016年 (Bruce Schneier. *Data and Goliath: The Hidden Battles to Collect Your Data and Control Your World*. W. W. Norton & Company, 2014)
- ミシェル・フーコー, 『監獄の誕生——監視と処罰——』 田村俣, 新潮社, 1977年 (Michel Foucault. *Surveiller et Punir — Naissance de la Prison*. Éditions Gallimard, 1975.)
- 宮部みゆき, 『R.P.G.』, 集英社文庫, 2001年